

二十一年九月二十五日にはロクスト州タカノロースに。

二十二年七月には再び極東へ帰って、ハバロフスクを転々。

そして九月二十一日には監獄に入れられ、獄中生活八か月。

二十四年五月にはホルトワニン収容所に移されて約一か月送った後、同年六月、奴隷船ながらの貨物船へ乗せられて、オホーツク海沿岸のマガダンへ。

八月十四日には、さいはての受刑地ホリマへ移される。北緯六十五度、北極圏のほりである。収容所わきには軍用犬二十頭余りがほえている。恐ろしい所へ連れてこられてものだ。生きて内地へ帰ることはできないのか。これまでの作業は鉱石採集。この辺は永久凍土のツンドラ地帯である。だから鉱石もなかなか採集できず、私たちの班は成績が悪いと、十日間は絶食で、お茶だけしかくれない。冬は夜明けが十時、日暮れが午後三時、気温は零下五十〜六十度、夜は南京虫に悩まされながらの一年半。凍傷にもならず、何とか生きのびた。

二十六年一月末、再びハバロフスク地区へ、そして二十八年七月にはナホトカに移り、二十八年十二月一日、やっと舞鶴に上陸、足かけ十年ぶりに内地の土を踏むことができた。

これひとえに、当時引き揚げ運動に携わってくださった方々、そして皆様方のおかげである。引き揚げ以来ハバロフスクの監獄でのこと、これまでのこと、抑留時の夢もたびたび、女房子供を残して連行される夢、ソ連の獄舎につながれた夢に長い間悩まされた。

あの極寒のシベリアの地で涙をのんで倒れた戦友を思うとき、胸が痛む。そして飢と寒さ、重労働を耐え忍び、引き揚げてきた人たちの苦しみや苦勞を、皆様にご理解していただければ幸いである。

ソ連抑留記

福島県 宗 像 次 男

入ソ時苦勞について

昭和二十年八月二十日、武装解除、ソ連の監視下に入り、実際の抑留生活になったと考えられる。

潘陽（奉天）鉄嶺地区の兵舎に九月上旬まで約二十日間生活し、待ちに待った帰国と称され、東部第一三〇混成旅団約千人の兵隊が、持てる限りの毛布、着衣、その他の装備をして、貨車に乗り込む。

出発も一日くらい待たされ、途中も列車の輸送の都合で半日あるいは一日待たされながら、ソ満国境、黒河に着いたのは十月初めの寒い日であった。同僚の中には、ソ連に連れて行かれるから今の中に逃げなければと、数人ほど逃亡した者がいたので、ソ連の警備も大変厳重になった。

いよいよ十月三日、黒龍江を渡り、ソ連に向かう予定であったが、船便がなく、江岸に野営となり、翌日四日朝、目が覚めると、着ていた大幕の上に雪が五センチほど積もっていて、先が思いやられ、身の毛がよだつ思いであった。

満々と水をたたえた川をお昼ごろ無事渡り、鉄のカーテンといわれるソ連領、ブラゴベスチエンスクに入っ

た。初めてみるソ連の町は、雪解けの中をほとんどの婦人子供ら裸足で、日本兵に食料と物品の交換をねだる者が多く、日本の乞食以下の生活ぶりに驚かされた。

本部の方から盛んに指令が来て、日本は今大変困っているから、品物はできるだけ物交しないで日本に持って行くこと、間もなくウラジオストクを経由で帰れるから心配しないようにとのことであった。

貨車は我々の意に反して、北上し続け、シベリア鉄道を西に向かう。多くの者は月や星の方向で行く先を判断していたが、諦めて無言の日が何日か続く中、巨大な湖バイカル湖を過ぎ、ウラル山脈の手前、ベトロパプロフスクから南下し、カラカン高原（海拔約二千メートル）、炭鉱地区で下車、重い荷物を必死に背負って、小雨の中、半日がかりで第十ラゲルに到着。心身ともに疲労困憊の極に達していた。

輸送途中並びにラゲルに着いてからの食事は、満州から持って来たコーリヤン、粟等のかゆに野菜スープというお粗末なものであった。

労働と食糧事情について

炭鉱地帯に来たからには直ちに入坑と考えていたが、スターリンの命令ない限り入れない。間もなく日本に帰るからといわれ、持って行った物は一時預かると称し、毛布、衣類、私物等一切没収され、敷布団は袋にオガ屑を入れたもので、その他毛布二枚が寝具であった。

最初の使役で、到着の夜、数人で出かけると、隣の部落の木材所に丸太の受領とか。ここで驚いたことには、夜陰に乗じて、人の気配を見ながら材木の盗みであった。とんでもない国に連れてこられたと落胆ひとしおであった。

何とか逃げて帰れないかと思案する者もいたが、厳しい監視の下、海拔二千メートルの高原地帯で、遙か天山山脈を望む遠隔地ではいかんともしがたく、涙をのんで、いつの日か帰れることを空頼みに、スターリンの命ずるままに三年間を過ごす運命となった。

ついに身体検査の結果で、炭鉱入山の決定が十一月から始まった。尻の肉つき具合によって、アジン、ドバー、トォリーの三段階に分けられ、アジンとドバーは炭鉱勤務、トォリーは地上勤務ということになり、幾つ

かの炭鉱に分散して、三交代で入坑する事になった。

自分たちの入坑した炭鉱は、しばらく休坑していた所で、燃料でなく薬品の原料にするとかで、条件が悪い。絶えず天井からしずくが垂れ、帰りにはぬれぬずみになっていた。

特に十一月末から本格的な寒さで、二番方の夜中十二時過ぎ帰りは、衣類がすっかり凍り、ちょうど鎧を着て、木の靴をはいた恰好で、しかも零下三十度〜四十度の寒さに耐えて、再び故郷の土を踏めるかと悲嘆に暮れ、再三陳情に陳情を重ね、半年くらい交渉の末、雨合羽の支給があり、ほっと一息ついたのも束の間、二年目になって、炭鉱に見切りをつけ、別の炭鉱に移ることにになり、直ちに五十一坑に入ることになった。

幸か不幸か、時々行われる身体検査にはいつもアジンで、炭鉱生活のみ、楽しみは何一つなく、まず食べることに、寝ることを身上として、どうしても命長らえて郷土の土をと考え、故郷の夢を見ること幾たびか。

さて、第二年目に入った炭鉱は、天井が低く、中腰でしか仕事ができなく、しかも炭質が悪く、ボタが大半の

悪条件で、ぬれる所からやっど解放されやれやれと思つたのに、とんでもない毎日であった。思うように出炭がなく、監督（ドイツ捕虜上り）にダワイ、ダワイの気合を入れられ、生き心地がしないありさま。

それに引きかえウクライナの大量餓で農作物は皆無とかで、食糧品の配給は目に見えて悪くなり、黒パンの配給も三分の一度になり、食事も穀類はほとんどなく、ジャガ芋二〜三個で重労働がしばらく続いた。

だれ言うとはなしに、ラーゲルの幹部が食糧の横流しをしていると言ううわさになり、こんな食べ物では働けない、ストにて解決しようかと相談がまとまり、ちょうど二番方、午後四時入坑を全員拒否し、それぞれの寝台から一歩も動かなかつた。労働ストは共産国において大罪であり、到底帰国の見込みないとのことであったが、背に腹はかえられないと、ストに突入したのである。

カラカンダ地区総元締め陸軍少将まで来て、頼むから入坑してくれと各棟を悲壮な声を出して回ったのは痛快であった。その実情を訴え、上級将官にやっど心情が届き、三時間後に入坑した。

その後、日本人上級将校、ラーゲル所長等の更送があり、食糧事情も徐々によくなり、九死に一生を得た観が強かつたが、相変わらず労働は厳しく重労働の連続で、私の仕事は、ブリチック（電気ドリルでさく岩）で発破の穴あけを一カ所明けるのに全力で二十分くらいかかるころもあり、ドリルの質が悪いため、切れなくなり、途中で鍛冶屋に地上まで上がって直してもらったり、地獄の職場であった。この炭鉱も二十二年の夏ごろ廃坑となりホツとしたが、相変わらず身体検査の結果、アジンであったため、六十四坑に入るようになった。

やっど仕事も普通の所になり、食糧事情も改善され、人間らしい生き方ができるようになったが、相変わらずラーゲルと炭鉱の往復であった。だれ言うとなくダモイの話が持ち上がり、それぞれ夕方等、同郷人と集まって話し合いから、演芸会等の余裕もできてきた。

このころから盛んに洗脳教育が始まり、新聞その他を通じて、いろいろと共産主義を礼讃する言動が多くなり、唯物論等の演習があり、希望者を募り、研究会等実施したが、何よりも健康で祖国の土を踏みたい一心で、ほと

んど加わらなかつた。無事に帰国できたら、こんな国に一度と来たくない嫌な所と心に刻むのみであつた。

待望の帰国

図らずも二十三年九月六日、朝一番方の入坑前に、入坑しないで待機するようにとの本部から命令があり、ダモイが実現できるのかと一心喜びもしたが、故国の土を踏まない限り当てにはならないと思つてしたが、間もなく帰れるとの連絡があり、同僚に別れの挨拶もしないで、午後ラーゲルを出発、相変わらず貨車に乗り込み、帰路につく。

途中ハバロフスクで一日シャワーを使え、休養を取つて二週間ほどかかつてナホトカに着く。(九月十八日ころ)港の近くのラーゲルに入れられ、一週間近く農家の手伝いに行く。民間人は大変親切で、牛乳やパン等いろいろ馳走になり、人心がついた思ひであつた。

そのころ、周辺の人々の話では、ナホトカに来て、船が来ないため逆戻りした話やら、民主主義を十分身につけないと帰れない等で、盛んに日本人のオルグによつて民主教育が行われた。

インターナショナルの唄を歌い、カチューシャに合せてダンスの指導等、夕食後九時ころまで毎晩賑やかに続いた。九月二十四日、やっと待ちに待つた乗船命令が出て、午前中に乗り込み、出帆することができ、胸をなでおろした。三千トンの遠州丸でナホトカの港を後に、一路日本海を舞鶴へと向かう。

船の中で食べた三年ぶりの白米のおいしさは、ラーゲルで幾度か夢に見たものであつた。また、船の中で騒然としていたので、行つて見ると、ソ連でオルグ活動の中心的役割を果たしていた者数人が多くの者から、どうしても日本と一緒に帰らせたくない、日本海に捨てて行くというわけで、つるし上げされていた一幕もあつたが、九月二十六日朝、舞鶴港の青い松並みに迎えられるときは、晴れ晴れとして三年間の労苦がうそのようであつた。

その後、検疫並びに上陸手続きを済ませ、九月二十九日、舞鶴出発、途中婦人団体等の温かい湯茶の接待を受け、また上野の赤旗に驚きながら、十月一日、四年ぶりに二度と帰れないと思つた我が家の敷居をまたぐことが

できたのである。

記憶をたどって

和歌山県 神前 恵 一

部隊で衛生兵として勤務し、負傷者の手当てや飲料水補給が勤務の内容ですごしていた。終戦になったことは、八月十五日もだいたい過ぎて、九月始め頃、部隊本部からの使いで知った。

九月十三日ごろ、部隊命令で本部に集合、武装解除となった。場所は鏡伯湖学園屯である。「ダメイ、ヴィステレ！」と自動小銃におびやかされながら、千人単位ほどに集団をつくられた。

食料も、部隊にあったものは全部没収され、わずかな高粱や粟、塩と砂糖少々、時には大豆（豆粕）が主食だった。飢えのために、運搬作業中にたおれる者が出た。

そうしたなかで死の行軍が始まった。行先はどこかは

知らないが、牡丹江に向かってソ連兵にかこまれての行軍である。隊列をりだつする者はかしくなくマンドリン銃で射殺である。戦友のことも考えてみても、いまは自分自身歩行していくのがやっとである。

五、六人ぐらいが射殺されるという行軍のすえ、戦利品である舟艇で牡丹江を渡った。日本に帰る言葉とは逆に、ソ連領へ「スイフン河」を経由してグラコフというこうばくのソ連領地についた。

飢えと夜の寒さがジーンと身にこたえる。入ソ最初に病院勤めを命ぜられたが、衛生一等兵の経験しかないので、カーシア（お粥）の運搬と、毎日死亡する抑留中死没者のしまつで、屍室から凍土に掘られた墓までの運び屋であった。

A、B、Cという具合に幕舎病棟が分けられてあったが、しかばねの始末は毎日三、四十人ぐらいはあったと記憶している。主としてタイセツト地区からの入院患者が死亡者の数では圧倒的に多く、カルテ（病人名、病名、死因等を記したカード）はソ連側しか見ることが許されていないので、どこの誰であるかがわからなかつた。